
上を向いて

ぶによ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

上を向いて

【Nコード】

N8809Z

【作者名】

ぶによ

【あらすじ】

彼との二回目のデート。その彼に身体を預けた瑠璃の身体は震えていた。

「すごいね。ここでこんなにたくさん見えるのは今日だけだね、きつと」

「そうだね」

翔に肩を抱かれた瑠璃るりは手摺から手を離さずにそつと身体を預けた。

夜空には満点の星。新月で月明かりすらない今日は、普段なら見る事の出来ない暗い光まで目に届いている。

風はなく、昼間南風が吹き込んだお蔭で、日が暮れてずいぶん経つはずの今でも寒くはなかった。

それでも瑠璃の身体は震えている。

翔と二回目のデート。前回とは違って、ぎこちなかった会話も普段通りに戻った。

映画を観て、マックでお昼。そしてウィンドウショッピング。

手を繋いでぶらぶらと歩きながら、服やアクセサリーの店を覗いて時間を過ごした。

そして暗くなった所で、翔の秘密の場所だというビルの屋上へ行く事になる。

今いるここがそうだ。

大した高さではないそのビルはしかし、街の外れの小高い坂の上に建っていて、私達の住むこの街を一望する事が出来るという。

確かにそれは嘘じゃなかった。

さすがに地方都市であるこの街の夜景は雑誌で見た摩天楼のそれとは程遠かったが、十分に美しかった。いや、彼と一緒に見られれば、百万ドル以上の価値があった。

しかもふたりきりだ。勝手に入り込んだこんな場所に、もちろん人目などない。

二回目のデートでキスは早いかな？ いやが上にも鼓動は高鳴っ

てしまう。

どきどきが止まらない自分を隠しながら、瑠璃はちらりと彼に目をやった。

足元から吹き上がった風がふたりの背中を撫で、そのまま瑠璃の長い髪の中に入ってふわりと膨らませた。
踵の後ろには床がない。

彼は瑠璃よりも震えていた。瑠璃のどきどきも、今は別のどきどきに代わっている。

地震が来たのだ。

ふたりの唇がまさに触れる寸前だった。

大きかったそれはふたりを振り落す事こそなかったが、ビルはそのほとんどが崩落してしまった。

残ったのは掴んでいる手摺を含めたビルの一面だけで、まるで壁が地面から突き出ているような状態だった。

街の電気は消えてしまい、周囲は真っ暗。

目が慣れるまで動かなかったのは正解だったが、自分達の置かれた状況を知るに付け、恐怖が身体を突き抜けた。

……下を見ちゃいけない。

そうしてふたりは空を見上げた。満天の星々を見上げた。

（後書き）

このストーリーはあくまでフィクションのお話です。
（ぶによシヨート第二十七話と同じ物です。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8809z/>

上を向いて

2011年12月27日19時50分発行